

【5月の気象】

5月の季語には、「新緑」「新茶」「麦の秋」など実りや爽やかな春を思わせる一方、「初夏」「立夏」など夏の始まりを思わせるものもあります。

この時期は季節の変わり目で気温の変化が大きい時期です。最高気温が 30℃を超える日もあれば、20℃に達しない日もあります。特に、移動性の高気圧に覆われて晴れた朝には、放射冷却による晩霜のおそれもありますので注意が必要です。

5月はさわやかなイメージがありますが、気温の日変化が大きいように、気象の変化も大きい時期です。低気圧が発達しながら日本海を通過することにより、広い範囲で天気は急激に変わり、暴風・しけとなり、東予東部では「やまじ風」が吹くことがあります。また、上空に冷たい空気が入ると大気の状態が不安定となり、激しい雷や突風とともに“ひょう”が降ることもあります。反対に晴天が続き、少雨や空気が非常に乾燥することがあります。松山では 2009 年 5 月 10 日に日最小相対湿度 6%を観測し、観測史上1位の記録となっています（第1表）。

第1表 松山の日最小湿度の低いほうからの記録

順位	観測値	発現日
1	6%	2009年5月10日
2	7%	2005年4月17日
		1950年4月15日
3	8%	2006年2月24日
		2005年5月28日
		2002年6月12日

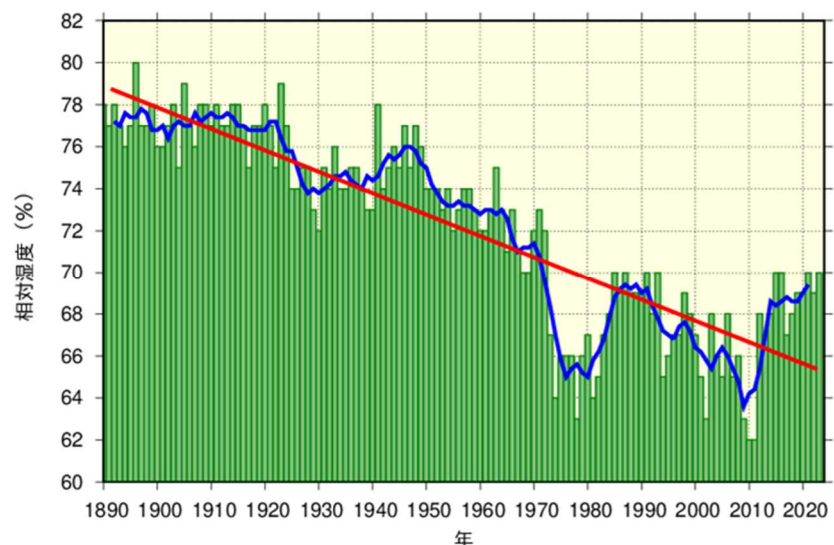
【気象用語】「相対湿度と実効湿度」について

みなさん、愛媛県の乾燥注意報の発表基準をご存じですか。発表基準として、「最小湿度 40%、実効湿度 60%」となっています。ここで、最小湿度というのは相対湿度の最小という意味で、一般的に今日の松山の湿度は 50%でしたといった場合、相対湿度のことを言っています。気温により空気中に含むことができる水分量には違いがあり、含みうる最大の水分が含まれた場合が相対湿度 100%となります。したがって、その気温で最大含みうる水分量に対して、現在の空気は半分の水分量であった場合は相対湿度 50%となります。

一方、実効湿度は木材の乾燥の程度を表す指標として用いられます。数日雨が続いた後、晴れて相対湿度が低くなっても、木材の表面は乾きますが、内部は湿った状態となっています。逆に相対湿度の低い日が続けば、木材の内部まで乾燥し燃えやすい状態となります。少しの雨では表面は濡れますが、内部は乾燥した状態です。実効湿度は現在の相対湿度の状況だけでなく、過去数日間の相対湿度の状況も考慮しています。

乾燥注意報の基準は現在どれだけ空気が乾燥（相対湿度）しているかと木材がどれだけ乾燥（実効湿度）しているかを考慮して決めています。

地球温暖化で気温が上昇していることは多くの方がご存じかと思いますが、あまり知られていませんが、相対湿度は逆に下降（乾燥）しています。松山だけでなく、多くの都市でも同様に乾燥してきており、松山では、100年で約10%乾燥しています。この要因として、空気中の水分量は大きな変化はありませんが、気温が上昇することで相対湿度が下がっていることが言われています。都市化の進んでいる地点ほど気温上昇が大きく乾燥が進んでいる傾向が見られます。



第1図 松山の年平均湿度の経年変化（1890年～2023年）
緑棒：各年の湿度 青線：5年移動平均 赤線：変化傾向